

Ⅱ 小学部の実践

1. 研究の概要

(1) 研究の経緯

「豊かな心と生活をめざして」のテーマのもと 小学部では学部集会「部朝の会」を実践研究の場としてきた。今年度で4年目を迎える。

1年目はテーマの設定に至る話し合いが中心であった。

2年目は「季節の移り変わりを感じとる感性」を豊かな心の一つと捉えて季節感を活動のメインに据えた。その際 季節感を感じとらせやすくするために夏は青 冬は白というように季節の色を設定して その色にちなんだゲームや劇遊びを行った。

この実践では 日常生活の中の色に注目する子がでてくるなど一定の成果が得られた。さらに これらの活動を通して 子ども同士のかかわり合いや子どもと物とのかかわりの様子が 我々の話し合いの中でよく話題になった。

3年目は「豊かさ」を「自然や社会や人とかかわり合いの中でその子らしく のびのびと生きること」と捉えた。この「かかわり合い」と「その子らしさ」の2つの視点から「部朝の会」の活動内容を再検討した。

「かかわり合い」では学級や学年を越えた「かかわり合い」の試行として縦割りのグループを編成した。その中で共同製作やゲームなど子ども同士が互いに協力したり意識したりできるような場面を設定した。「その子らしさ」ではリズムや造形活動において一人一人の得意なことや表現したいことを反映させるように配慮した。

また 4名の対象児を特定して 縦割りグループでの子ども同士のかかわり合いが育つ様子と各種の活動における子どもの個性的なふるまいや表現を実践記録としてまとめた。

これらの実践を振り返る中で「子ども同士のかかわり合いが育ちににくい子」への対応が課題としてできた。

(2) 今年度の方針

①研究の目的 内容 方法

今年度は昨年度に引き続き「かかわり合い」と「その子らしさ」の2つの視点から「部朝の会」（「ランランタイム」と改名）の活動内容を検討していくことにした。

研究の目的 内容 方法は以下のとおりである。

〔研究の目的〕・子ども同士の「かかわり合い」を育てる指導のあり方を検討する。

・「その子らしさ」を見つけ 活かす指導のあり方を検討する。

〔研究の内容〕ア「子ども同士のかかわり合いが育ちににくい子」への働きかけの手だてを検討する。

イ「その子らしさ」を見つけ 活かす視点から実践を行う。

〔研究の方法〕・「ランランタイム」の活動内容を上記アイの観点で話し合う。

・「ランランタイム」を実践する中で4名の対象児を特定して 彼らの様子を上記アイの観点で観察 記述する。

- ・子どもの様子を話し合いながら指導の内容や方法を考えていく作業を繰り返す。

②「部朝の会」から「ランランタイム」へ

昨年度の研究では「子ども同士の豊かなかかわりを育てるために」ということで新たに縦割り集団を組織した。ここではその子らしい活動を大切にして友達や物とかかわることをねらい「かかわり」という面から一人一人の目標をもって取り組んだ。このようなねらいと学習内容をもった「部朝の会」はグループにおけるリーダー意識の芽生えや学級を越えたつながりなどユニークな学習集団となってきた。そこには今までの「部朝の会」の範疇では入りきらない質的な変化が認められた。

そこで今年度は「部朝の会」に新たな名称をつけることにした。子どもが言いやすく学習活動に親しみをもてるようにとの願いから「ランランタイム」と命名した。

なお 昨年度の反省をふまえてグループ編成や活動の種類に検討を加えた。

- ・昨年度は縦割りグループの子どもにかたよりがあったので今年度はどのグループにもある程度「かかわり合い」がもてる子を複数配置することにした。
- ・「自然とのかかわり」の中に新たに「さいばい活動」を取り入れた。これは子どもの豊かさの幅を広げるねらいがある。活動内容は野菜 草花の栽培である。

③学習集団

小学部には20名の児童がいる。この20名を5名ずつ4つのグループに編成した。各グループは異年齢の集団とした。いわゆる縦割りグループである。各グループにはリーダーを2人置くことにした。

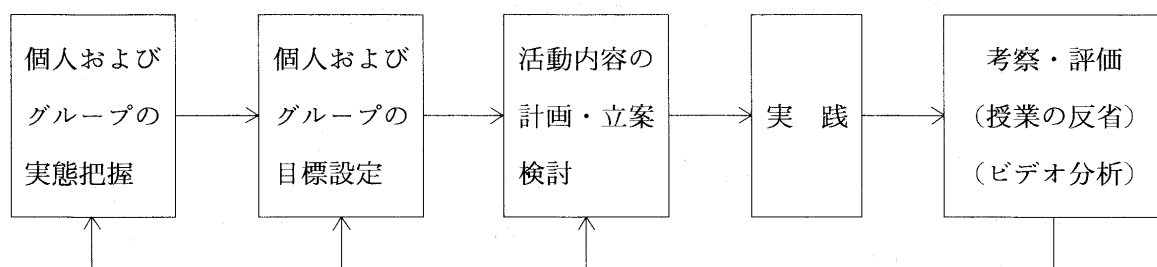
④指導体制

指導体制は昨年度と同じである。教師は二つのチームに分かれ メイン指導・サブ指導の役割を季節や単元によって交替して行うこととした。それぞれの役割については次のとおりである。

メイン指導 チー ム	……事前に活動内容を計画 立案し 部研究会で提案する。そこで教師全員で活動内容を検討 確認した後 教材つくりや当日の準備 進行までを担当する。特に授業の進め方については ティームティーチングを効果的に行うため 打合せを綿密に行う。
サブ指導 チー ム	……メイン指導者の意図をくみながら 児童と同じ立場にたって授業に参加し 児童の手本となると同時に活動を盛り上げる。

⑤学部研究会

毎週火曜日に学部の研究会を行った。ここでは子どもの実態や研究の目的 内容 方法についての共通理解をはかった。各グループ 個人ごとに「かかわり合い」「その子らしさ」という視点から独自の目標を設定した。授業の記録は ねらいや活動内容についてよく把握しているメイン指導チームの一人がビデオ撮影して それを見ながら授業の反省や子どもの様子の分析を行った。この一連の研究のながれは以下のとおりである。



図Ⅱ－１

(新 保 利 久)

２．子ども同士のかかわり合いをめざした実践

(１) ランランタイムのねらい

ランランタイムでは この研究のテーマでもある「子ども同士のかかわり合い」と「その子らしさを発揮すること」をめざしている。小学部の子ども達と教師全員により行われるこの学習は 普段の学級では得られないより豊かな人間関係を築き上げることができる。さらに集団の力を借りてダイナミックな活動を展開しながらより自発的に学習することができる。これまでの研究実践の中で具体的にねらいとしてきたものには次の３点があげられる。

- ・学級の枠をこえていろいろな友達や先生とかかわる。
- ・季節に合った自然のものや本物と多くふれあう。
- ・さまざまな活動を通して自ら学び自ら表現する。

(２) 指導にあたって

①学習集団について

本校では 小学部・中学部・高等部を縦割りにして「赤」「白」「黄」「青」の四つのグループが編成されている。全校集会のゲームや運動会ではこの集団をもとにして活動が行われており 昨年度の「部朝の会」ではこれらのグループをそのまま活かして学習集団を構成した。今年度の「ランランタイム」でも引き続き 教師と子どもたちがどれかのグループに所属し学習活動を行っていくこととする。グループの名前はそれぞれ「赤いくるまグループ」「白いうさぎグループ」「黄色いちょうちょうグループ」「青いことりグループ」である。また リーダーの名前も昨年通り「お父さん」「お母さん」とする。なお 各グループと個人のねらいを13ページに掲載した。

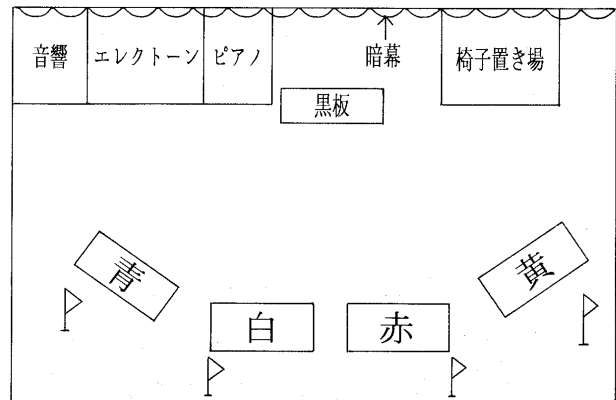
②学習内容の選定について

これまでは 「歌・リズム」「ゲーム的活動」「つくる活動」の三つの活動を念頭において学習を展開してきた。今年度はそれに加え 草花や作物を育てたり 収穫の喜びを味わったりすることも子供にとって必要なのではないかと考え 「さいばい活動」を取り入れた。これらの四つの活動を組み合わせて単元を構成し 学習計画をたてていく。その際 季節や行事を考慮するとともに 歌やゲームやつくる活動においては表現したり協力・競争したりできるような内容を考えていくことにする。また 興味関心の幅が狭い子に対し

ての手だてとして 自分たちで栽培した野菜を使った「調理学習」も随時取り入れていくことを確認した。

③学習環境について

自分たちのグループが意識しやすいようにシンボルとなる旗を子どもたち自身で作って それぞれの場所に置いた。座席の配置についてはグループごとに並ぶが どの子も授業を進めている教師の方を見やすいように 横一列に弧を描くように並ぶことにした。また授業を進めるにあたっては 音・光・色など五感に訴えるために音響設備・ホワイトボード・



図Ⅱ-2 小学部ホール配置図

OHP・暗幕などを有効に使ってみんなが一斉に注目するような工夫を行うこととした。

「さいばい活動」では 教室横のテラスにプランターを置き いつでも花をながめたり水やりできるようにした。またテラスのすぐそばの運動場に花壇をつくることで草花の成長の様子を観察したり作物の世話や収穫をしたりできるようにした。

④指導の方法・手だてについて

自発性や意欲を高めるために

- ・授業が始まる時には みんなで「ランランタイムのうた」(P. 28参照)を歌って 学習の始まりをどの子にも意識させる。高学年の週番の子が前に出て歌詞を示して それぞれのグループのそばまで歩み寄りグループの名前をよびかけるようにする。サブの教師も子供と一緒に「はーい」と返事をして促したり場を盛り上げたりする。
- ・授業をすすめる教師は あいさつ ランランタイムのうた 学習内容の提示などいくつかの活動の進行をする。活動ごとに担当の教師が変わることで 活動のくぎりを意識づけたり興味をもたせたりする。活動においては教師の持ち味を活かして楽しんで行く。
- ・どのような活動をするのか具体的にわかるように 学習の流れを一定に見通しをもたせることも大切である。また指導にあたっては ほんものや身近なものを提示したり場面の雰囲気であらわす絵や音楽を用意したりして興味をもたせるようにする。

子供たちのかかわりを育てるために

- ・それぞれのグループを担当している教師は常に子供たちを観察し かかわりを育てるために「○○ちゃんつれてきてね」「○○くんと二人で頑張ったからうまいね」など子どもと子どもをつなぐような適切な言葉かけを場に応じて行う。
- ・グループ意識が弱い子には みんなに用具を配らせたり活動の中心となる役割を与えたりして友達を意識し認め合うような状況をつくりだす。友達とのかかわりが比較的多い

子とかかわりの少ない子をペアにして 座席を隣同士にしたりゲームや造形活動などで一緒にとりくませたりして 互いに意識し合って活動させる。

- ・グループまたはペアの友達同士で協力させるために 一人では重くて運べないものや自分だけで作ろうとしてもうまくいかないものなどを活動に取り入れるよう工夫する。

その子らしさを発揮させるために

- ・子どもの特性や行動の特徴などを教師間で十分共通理解することが必要である。その上で 学習活動中においてその子のいかし方をタイミングよくとらえていくよう留意する
- ・大きな集団の中で心を開放しリラックスした楽しいムードの中での活動がその子らしさを表出させるものと思われる。そうした和やかで親しみやすい雰囲気づくりに心がける。

表Ⅱ－１ グループと個人のねらい

	児 童 学 年	ね ら い
赤	グループの目標	グループの仲間を意識しながら 楽しく活動に参加できる
	A 1年男	Eとペアの意識をもつ。他のメンバーがわかる
	B 2年女	Dとペアの意識をもち グループの友達と一緒に活動に取り組む
	C 3年男	教師の援助をうけながら 他のメンバーとかかわる
	*D 4年女 事*E 6年男	お母さん役の意識を深め 年少の子とのかかわりを育てる Aとペアの意識をもち かかわり合いを育てる
白	グループの目標	白グループとしての自覚をもって 楽しく活動に参加できる
	事 F 3年男	自分から友達にかかわる。自分から活動に参加する
	*G 5年女	お母さん役の自覚をもち 他のメンバーとかかわる
	*H 6年男	お父さん役の自覚をもち 他のメンバーとかかわる
	I 4年男 J 2年男	友達と一緒に活動できる 友達と一緒に活動できる
黄	グループの目標	5人が得意なことを生かして協力し合う
	*K 6年女	黄グループ全体のリーダーであることを自覚する
	*L 4年男	新しい活動に挑戦し 自信をつける
	事 M 5年男	配る係を通して活動に見通しをもち 進んで参加する。O男を意識する
	N 3年男 O 1年男	教師とでなく 友達と一緒に活動できる 泣かないで いろいろな活動に参加できる
青	グループの目標	グループの仲間を意識しながら 楽しく活動できる
	事*P 5年男	お父さん役として 他のメンバーとかかわる
	Q 6年男	Tとペアで活動する
	*R 4年女	お母さん役の自覚をもち いろいろな仕事をする
	S 2年女 T 1年男	友達と一緒に活動できる 青グループの自覚をもって活動する

(「事」は事例対象児童 *はリーダー)

(河 合 利 秋)

(3) 活動の内容

グループ作り (4月)

新しい友達や先生を迎え 昨年と異なったメンバーで縦割りグループを構成してランランタイムを行うことにした。それぞれのグループでリーダー役の「お父さん」「お母さん」を選び グループ意識をもたせるためのゲームを行った。

配 時	1	2	3	4	5
グループづくり	<div> <div></div> <div></div> <div></div> <div></div> <div></div> </div> 紹介式 グループ分け リーダー決め ランランタイム発表				
うた・リズム	<div> <div></div> <div></div> <div></div> <div></div> <div></div> </div> チューリップ				
ゲーム的活動	<div> <div></div> <div></div> <div></div> <div></div> <div></div> </div> 集まれゲーム チューリップづくりゲーム				
さいばい活動	<div> <div></div> <div></div> <div></div> <div></div> <div></div> </div> 花の苗植え				

①グループづくり

昨年同様縦割りで4グループを作った。その名称も昨年慣れ親しんだ「黄色いちょうちょう」「赤いくるま」「白いうさぎ」「青いことり」にした。全校生徒が集まる全校集会もこの4色で構成されているので 縦割りグループで活動する機会は週2回のランランタイムと毎週木曜日の全校集会を加えると3回になる。

子どもたちにはグループのメンバーが替わることを知らせ 今年は何色になるのかという期待感をもたせた。旗も昨年度と同じものを使うことにより 高学年の子どもの中には「今年は〇〇グループになりたい」「〇〇さんと一緒にになりたい」などとはっきり意志表示する子も見られた。

グループ分けにおいては 子どもの性格 行動の特徴 学級での相性 運動能力を考慮し グループのバランスが良くなるよう総合的に決めた。

リーダーの呼び方は昨年から慣れ親しんだ「お父さん」「お母さん」を引き続き使うことにした。高学年の子にリーダーという意識をもたせ その役割を果たして欲しいとの願いはあるが 自分になりたいという自主性も尊重することにした。

②歌「チューリップ」

前年度にグループの色の花が咲くチューリップの球根をプランターに植えた。子どもたちは水やりを何回も行い 自分のグループの花という意識を高めていった。ちょうどそのチューリップがテラスで咲いており 子どもたちに本物を見せチューリップの歌をうたうことにした。

グループ毎に前に出て歌うときは 4色のチューリップが咲いたプランターを並べステージにした。そうすることにより 活動する場も分かりりやすくした。子どもが折り紙で作ったチューリップの花を持つことで 見ている子もチューリップや歌に対して興

味をもちやすいようにした。

③集まれゲーム

新しいグループや旗に早く親しむことができるように 旗を使って「集まれゲーム」を行った。音楽に合わせ好きな速さで歩いたり走ったりし 笛の合図でそれぞれの旗の自分のグループの椅子に座るというルールである。旗以外の手がかりとしてグループの色のゼッケンを身につけ 色が分かりやすいようにした。

子ども同士で集まることができるよう グループのメンバーを覚えた子には 戸惑っている子を誘って座るように声かけした。ゲームの後には 全員が早く座れたグループ上手にリードできた子を紹介し みんなで拍手して褒めるようにした。

④「ランランタイム」の名称発表

子どもたちが馴染んできた「部朝の会」が「ランランタイム」になったことを発表した。30cm位の円形の色紙に「ランランタイム」の文字を一つずつ書き 黒板の上に1枚ずつ貼っていった。子どもたちには全く知らされておらず 高学年の中には今まで慣れ親しんだ「部朝の会」がどんな名前になるのだろうと真剣に見ている子もいた。「ランラン」はよく知っている歌の中にあり 「タイム」は子どもたちが大好きな「ティータイム」でも使われているところから すんなり口にするようになった。この「ランランタイム」の文字カードは毎回黒板に貼ることにした。

⑤チューリップづくりゲーム

段ボール紙にチューリップの花形にくり抜いた模造紙を貼ったものにそれぞれのグループの色を塗ってリレー形式で花を完成させることにした。

刷毛や筆がまだ使えない子もいるので どの子もすぐに取り組めるように 着色にはスポンジを使用した。そのスポンジには同じ大きさの角材を接着しどの子も持ちやすいようにした。

早さや綺麗さを競わず スポンジをバトン代わりにして 次の子に手渡しすることと大きな絵なので好きな場所を自由に塗ることをねらいとした。

出来上がった作品は全員の前で発表し ゲームのなかで上手だったところ がんばった子をほめた。いつでも見ることができるように 作品は小学部の掲示板の下に展示した。

⑥花の苗植え

グループの色の花をプランターに植えることにした。

プランターは各グループ2個ずつ用意した。花は折れにくくて持ちやすい丈が15cm以上のものを選択した。これは子どもたちが自分のグループの色だとはっきり分かりプランターに移植するときに少々手荒に扱っても折れないからである。自分で出来る子にはなるべく自分でさせるようにした。土を触ることが嫌いな子もいたが 教師が援助して取り組ませた。

棒に花の名前が書かれた5cm×15cmの板を釘で打ち付け プランターに挿した。ほとんどの子は釘打ちが初めてなので 最初に釘を少し打っておくことにした。難しい子には援助した。何人かは「自分でする」と言って最初釘を少し打っておくと 金づちで打

表Ⅱ-2

グループ	花 の 苗
黄	マリーゴールド
赤	サルビア
白	金魚草
青	ペチュニア

てた子がいた。家で経験しているのか げんのうの扱いが上手な子も見られた。

出来上がったプランターは教室前のテラスに並べ水やりを行った。水やりに使うジョーロは子どもたちが持ちやすい小さなものを選び 興味を持ちやすいように かわいい形や色のものをグループに1個ずつ用意した。水やりはお父さんお母さんを中心にならでも行うことにした。子どものなかには 水やりに大変興味を示し毎日決まった時間に 自分から進んで行う子も見られるようになった。

こどもの日 (5月)

この季節に子どもたちが目にするのは 毎年校庭に空高く泳ぐ鯉のぼりである。しかしちょうど本校の生活訓練棟の建築工事が行われており 例年鯉のぼりを立てていたポールが撤去されてしまい 鯉のぼりが揚げられなくなった。鯉のぼりが見られなくて残念がる子が多かったので 本物の鯉のぼりを使う活動を取り上げることにした。また 行事にちなんだ季節の食べ物である柏餅を食べることにした。

①紙かぶと作り

こどもの日の飾り物といえば兜があげられる。家に飾られているのを見て「かぶと」という言葉を知っている子も何人かいる。そこで紙かぶとを作ることにした。ケースに入った飾りの兜を見せながら「子どもの日」の話をした後に実際に触らせることによって興味を高めた。その後 紙かぶとを作ることにした。

配 時	1	2
うた・リズム	鯉のぼり	
つくる活動	紙かぶと	

一人の子が前に出てみんなの前で折り方を見せ 各グループの代表が90cm四方の各グループの色の紙で折ることにより 自分たちも早く作りたいという意欲を高めた。大きな紙から作るのは難しい子でも 兜らしく出来上がるようにあらかじめ紙には折り目をつけておいた。

②歌「こいのぼり」

「こいのぼり」の歌に合わせて本物の鯉のぼりを動かした。各グループから一人ずつと教師が入り5人で協力して一番大きな「鯉のぼり」を左右に振った。グループから一人が出て楽しそうに動かしているのを見て 次に自分もしたいという意欲が高まった。身長が低く「鯉のぼり」からやっと顔が出る子が多かったので2回目は栽培用の180cmの支柱を5本付け それを持って揺らすことにした。



「高く泳ぐこいのぼり」

前回以上に5人が協力しないと「鯉のぼり」が倒れるので子どもたちの手には力が入っていた。鯉のぼりが天井近くで揺れているので 見ている子どもたちは今までになく関心をもって見上げていた。

③柏餅を食べよう

行事にちなんだ季節の食べ物を味わわせたいと考え柏餅を食べることにした。「おはようございます いつもありがとうございます」と和菓子屋さんが入ってきたとき 子どもたちは誰だろうという顔をしていたが お菓子屋さんだとわかると喜んで拍手していた。出来立ての柏餅は どの子も食べられるように半分に切り分け お茶と一緒に味わった。

ランランタイムのうた (5月)

部朝の会からランランタイムへの名称の変更に伴い ランランタイムの歌を作ることにした。(28ページ資料参照)

子どもたちが覚えやすいように「ランランタイム」の歌が書かれた大きな歌詞カードを黒板に貼り 教師全員が合唱団になり子どもたちの前で披露した。各グループの名前を呼び次の部分では教師がグループの前に出て「ハーイ」という返事をした。子どもたちが返事する部分では 教師が各グループの前に移動して歌うことで 返事を促した。元気よく大きな声で歌っているグループを褒めた。

花壇をつくろう (5月)

春の花が出そうこの時期に 自分たちの野菜や花を植えるために花壇を作ることにした。大きな板にグループの色を着色し 教師と高学年の子どもたちが協力して組み立てた。また 子どもたち全員に 自分たちの花壇という意識を持たせるために 土運びゲームを取り入れた。

①花壇づくり

子どもたちと一緒に自分たちの花壇を作ることにした。花壇づくりに使う板の大きさは30cm×180cm 30cm×90cm 厚さ3cmである。この花壇は将来的に移動出来るようにすることと水はけを考えて底板なしとした。組み立ててからの着色は難しいと考え ホールいっぱい16枚の板を並べ それぞれのグループ色を塗ることにした。

配 時	1	2
うた・リズム	ランランタイムの歌	
つくる活動	花 壇	
ゲーム的活動	土運びリレー	

塗料は子どもたちの手についても落としやすいように水性の外壁用塗料を使用した。グループにはそのグループの色の1リットル缶と刷毛2本を渡した。刷毛の数を少なくすることで順番があることを知り 待っている間は友達の塗り方や次はどこを塗ろうかという見通しを持つことができる。塗料の濃さは子どもの実態により濃い方がよい場合と薄い方がよい場合があるので グループの教師に任せて一律にしなかった。

子どもたちは大きな板に大きな刷毛を使って はみ出すことを気にしないで自由に着色できるので楽しく取り組んだ。

着色した翌日 高学年の子どもたちと教師が協力して花壇を組み立てた。5・6年生でも3cmの厚さの板に釘を打つことは一苦勞である。教師と協力して自分たちの花壇が

出来上がったときの喜びは大きく また教師から褒められるので作ってよかったという実感がもてたようであった。

出来た花壇はテラスの前にランランタイムと同じ並べ方で置いた。

②土運びリレー

小学部前の運動場の隅に山のようにになっている園芸用の土を自分のグループの花壇に運ぶことにした。自分たちの手で土を運ぶことにより 花壇にはたくさんの土が入っていることを知り 自分たちの花壇だと意識できると考えた。

土の運搬道具は一輪車
子供用一輪車 大小のバケツを用意し 子どもたちの

能力に応じて選択した。グループ対抗で一輪車を押したりバケツを持ったりして土山まで移動し 教師に適量の土を入れてもらい スタート地点の花壇まで運ぶリレーを行った。

また いも畑用の花壇を製作し 休憩時間などを使って 土運びを行うこととした。高学年になればなるほど1回に運ぶ量が増え 一輪車の扱いも上手になっている。また高学年の子どもたちが運ぶのを見て 低・中学年の子どもたちも自分からバケツや一輪車を使って運ぶ姿が見られた。

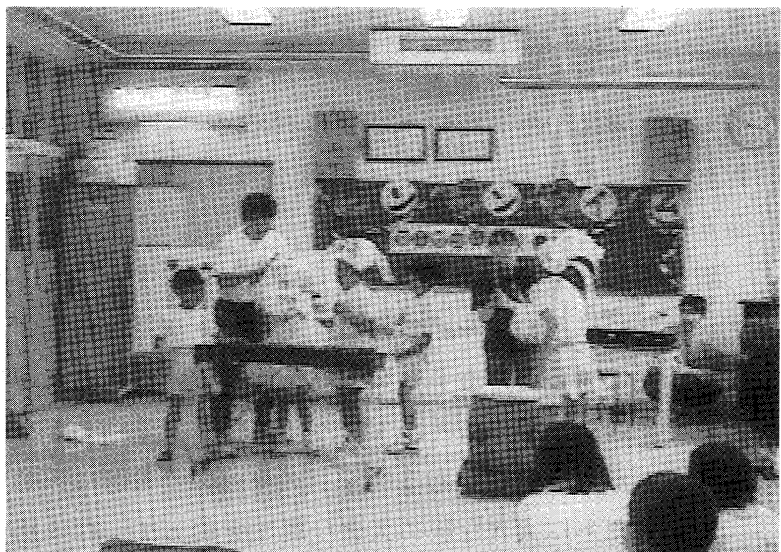
アンサンブル小学部 (6月)

5月終わりに「オーケストラ・アンサンブル金沢」の演奏を聴く機会があった。子どもたちはいろいろな楽器の音色に触れ 大きなホールいっぱい響く生の音楽に体全体でリズムを取ったり 聴き入ったりしていた。その楽しい経験の余韻が残ってる間に この単元を設定した。活動内容は「アンサンブル小学部」の発表会を目指して グ

ループの友だちと身近な素材を使って衣装を作ったり 音楽に合わせて自由に演奏や歌や踊りを楽しんだり 他のグループの演奏や歌や踊りを見たり聴いたりすることである。



「よいしょ、よいしょ！」



「みんなでばんばん」

①学級発表会

「アンサンブル
小学部」の発表会
の選曲のために
導入として学級
発表会を設定し
た。まず子どもた

配 時	ア金 ン沢	1	2	3	4
うた・リズム	サ演 ン奏 ブ会	学級発表会			
つくる活動	ル鑑 賞	グループ練習			
		衣装作り			

ちの大好きなミッキーマウスマーチの曲に合わせてポンポンを両手に持った4人の教師が登場し 音楽に合わせて踊ってみせ 楽しい雰囲気を作り上げた。この後各組が過日の日曜参観日に行った演奏や歌や踊りを順に発表した。3組はいろいろな楽器を使った演奏と歌で「かえるの合唱」 2組は「ぶんぶんぶん」の合奏 1組は即時打ちの「ぱんぱん」を木琴などを使って発表した。

②グループ練習

グループで発表する曲はあみだくじで決めた。黄色グループは「ぶんぶんぶん」赤グループは「ミッキーマウスマーチ」白グループは「パンパン」青グループは「かえるの合唱」となった。みんなの前で一度演奏した後 グループ別に場所を決めて練習した。練習をするだけでなく どうしたらもっといいものになるかを考えた結果 衣装作りなどをして「アンサンブル小学部」の雰囲気を盛り上げることにした。

③衣装づくり

曲にちなんだもの 一人一人が製作に取り組めるもの 短時間で仕上げられるものとの観点で衣装を考えた。各グループの発想で黄色グループは蜂の触覚 赤グループはミッキーマウスの耳と赤い大きな蝶ネクタイ 白グループはラテン風の帽子や小道具 青グループはかえるのお面を作ることとなった。各グループごとに集まり はさみ のり 紙 セロハン セロハントープなどの道具や材料を使って一人一人ができる活動に取り組み 個性あふれる衣装が完成した。できあがった衣装をグループごとに試着し 見せ合った。拍手や歓声がホールに響き 発表会に向けてのムードが盛り上がった。

④発表会「アンサンブル小学部」

発表会にふさわしい演出をということで 飾り付けをした簡単な舞台を設定し 観客席を用意した。自分の演奏の時は元気いっぱい頑張ったのはもちろん 他のグループの演奏の時も拍手や声援で盛り上げた。アンコールで再び演奏するグループもあるなど 楽しい発表会となった。

たなばた (6月～7月)

小学部で毎年恒例になっている7月の行事「たなばたまつり」を取り上げた。導入ではブラックパネルシアターを使って星空の雰囲気を醸し出した。「たなばた」の歌は単に歌うだけではなく どの子も楽しめるように笹を持って歩いたり 振ったり ツリーチャームを鳴らしたりして その子らしい表現を楽しむことにした。また飾りづくりや星つりゲームに取り組むことを通して「たなばたまつり」への気持ちを高めていった。

配 時	1	2	3	4	た な ば た ま つ り
う た ・ リ ズ ム	<div><div></div><div></div><div></div><div></div></div> <div>たなばた</div> <div><div></div><div></div></div> <div>パネルシアター</div>				
つ く る 活 動	<div><div></div><div></div><div></div><div></div></div> <div>たなばた飾り</div> <div>飾りつけ</div>				
ゲ ー ム 的 活 動	<div><div></div><div></div><div></div><div></div></div> <div>星つりゲーム</div>				

①パネルシアター

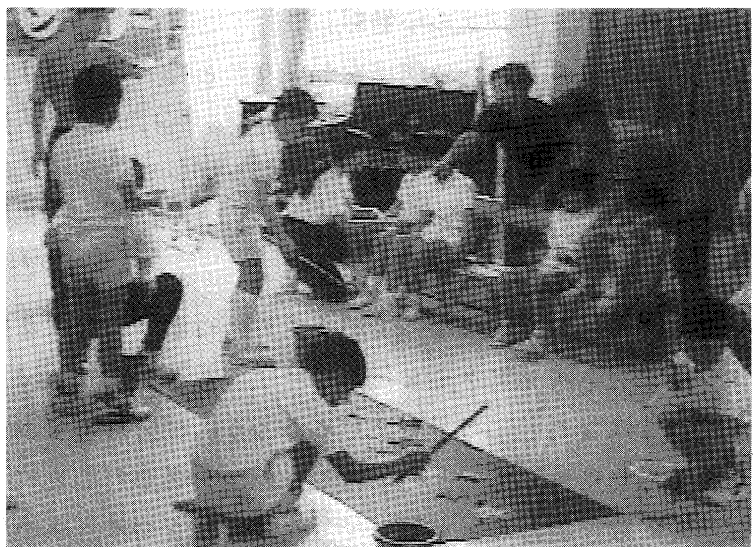
夜空の雰囲気を出すためにブラックパネルシアターによる七夕の話を導入で取り入れた。蛍光塗料で着色したたくさんの星が薄暗いホールに鮮やかに浮かび上がり おり姫とひこ星の二人が踊った。薄暗いホールの真ん中から七夕のイメージが徐々に広がっていった。

②歌「たなばた」

歌の曲想に合った子どもらしい表現をねらいとして ゆっくり歩く 笹を振る きれいな音色を出すという3つの動作を盛り込んだ構成とし まず教師が見本を示した。天の川にみたてた紐に沿って歩くことによって ゆっくりとした動きを自然に表現できた。子どもたちが本物の笹を振るとさらさらと音がして歌詞のイメージを体で感ずることができた。歩いて行くと最後にツリーチャイムのところに行き着き きらきらときれいな音がホールに響いた。してみたいという気持ちを大切にし 順に行った。笹を振りながら踊るように歩く子 ツリーチャイムを目指して進む子などその子その子の独自の表現が見られた。また友だちの動きを見ることで自分もしてみたいという気持ちを高めることができた。

③たなばた飾りづくり

各グループで栽培している野菜の飾りを作った。黄色グループはとうもろこし 赤グループはトマト 白グループは大根 青グループはなすである。作り方はできるだけ短時間に作れること 誰もがその工程に取り組めることを考え 新聞紙を丸める 色紙を巻く シールを貼るなどの活動を取り入れた。



「おとさないように、そーっと」

④星つりゲーム

七夕にちなんで星を扱ったゲームを行った。

ホールの真ん中に夜空をイメージした黒い紙を置き 天の川のようにちりばめた星を一斉に釣竿で釣り上げる。グループの仲間意識を高めようと4グループ対抗のリレー形式で行い 星をたくさん釣ったグループが勝ちという簡単なルールにした。釣竿の糸の先には磁石を付け 星の裏には薄いステンレスシートを張り付け どの子も釣るのが容易になるように工夫した。早さを競っている子 友だちの様子を見たり応援したりする子の姿も見られた。また取ってきた星は最後にホワイトボードに並べることで どのチームががたくさん取ることができたかが一目でわかるようにし 星の数をみんなで数えた。

おおきなぶどう (9月)

毎年9月の中旬に小学部全員でぶどう狩りをする行事がある。ぶどう狩りの後 ぶどう棚にたわわに実っているぶどうを一房一房収穫した情景を思い出しながらグループで一つの大きなぶどうを作ることになった。

配 時	ぶ狩 どり	1
つくる活動	う	おおきなぶどう

作ることになった。作る際に子どもがわかりやすく 作りやすいことを念頭においた。ぶどうの一粒は子どもの手にあうように 新聞紙の半分を使って野球ボール程度の大きさに丸めた。できたぶどうの粒をセロハンで包み セロハンテープでぶどうの房の形の台紙に貼った。新聞紙を丸めることに専念したり セロハンテープを切る係りになったり お互いに協力して活動を行った。グループごとにたくさんのぶどうの粒ができ 台紙にすべて貼り終わると子どもの体が隠れるくらい大きなぶどうができあがった。

おおきなおいも (10月～11月)

毎年秋にさつまいもほりを行っている。この行事に関連して「おおきなおいも」と題した簡単な音楽劇に取り組むことにした。収穫したさつまいもを子どもたちが協力して運べるようにゲームを2種類取り入れた。収穫したさつまいもは「やきいも」や「イモきんとん」にして食べた。

配 時	1	2	3	4	5	6	7
う た ・ リ ズ ム	←→ おおきなおいも			←→ おおきなおいも			
つ く る 活 動						←→ イモきんとん	
ゲ ー ム 的 活 動	←→ おいも運びリレー			←→ おいも運びリレー			
さ い ば い 活 動	←→←→ いも堀り やきいも						

①音楽劇「おおきなおいも」

昨年度と同じ内容で「おおきなかぶ」をアレンジした「おおきなおいも」を行った。

この音楽劇はストーリーに繰り返しがあって子どもたちに分かりやすい。また登場人物にお父さん お母さん お兄さん等グループ内の役割をあてはめることができることから自分の役を意識しながらグループの友達と楽しく劇に取り組めることをねらいとした。さつまいもに見立てた大きな袋の中に教師が入り 最後に全員で引っ張ったときにさつまいもが抜けるように演じてみせると 子どもたちもとてもしてみたそうであった。劇を見ながら「おおきなおいも」の歌をうたったりグループ毎に衣裳をつけて演じたりしてみんなで一緒に楽しむことができた。

②おいも運びリレー

2チームに分かれて 大きなさつまいもを二人で手に持ちポールを回って帰ってくるリレーを行った。一人では持てないが二人なら持てる小さな体育用マットを巻き それに「おおきなおいも」の時に使ったものと同じ紫色の布をかぶせてさつまいもに見立てた。大きなさつまいもは2人が協力しないと運ぶことが出来ないのので 同時に持ち上げるためのかけ声や合図が必要になってくる。途中で落とした場合にも 同時に持ち上げるためのかけ声や合図をするように声かけを行った。



「力を合わせてえっさ、えっさ」

収穫したさつまいもを使って再び「おいも運びリレー」を行った。今度は天びん棒につるした箱を用いた。スタート時には箱の中にさつまいも5個入れておき 折り返し点に積んであるさつまいもを一人1個ずつ箱の中に入れ次の二人にタッチすることで 順番が後になるほどさつまいもの数が増えて重くなるよう工夫した。本物のさつまいもを使うことにより 食べ物を大事に扱うことや2人で協力することにより チームワークを育てることをねらった。

天秤棒を肩にかつぐことは難しく 初めての子が多かったが 誰も箱からさつまいもを落とさなかった。

③やきいも

自分たちで収穫したさつまいもを使ってやきいも作りを行うことにした。手順は さつまいもを新聞紙で巻き 水に濡らしたあと軽く絞り アルミホイルで巻くものである。一人一人のやきいもの準備ができたならそれを持って テラス前のコンロへ移動した。ランランタイムが始まる前から火を起こしていたのですぐに集まる場所が分かった。1グループずつ順番に前に出てコンロ上の網に置いていった。毎年行っているのでも 活動に見通しをもって取り組めた子が多かった。焼きあがったいもは テラスにテーブルを設置し日頃食べない子もやきいもづくりの雰囲気でおいしく味わうことができた。クルクルと巻くことはどの子も出来るので適切な内容であった。

④いもきんとんづくり

さつまいもを使った調理で短時間で協力して出来るのでいもきんとんを作ることにした。事前に蒸して皮をむいたさつまいも 砂糖 干しぶどう 調理器具を用意し 導入で作っておいしそうに食べたことで 意欲が高まった。作る手順は 叩く 混ぜる 包むという簡単な動作だけで子どもたち自身で作れるようにとの配慮から まずイモをつぶす 次に砂糖 干しぶどうなどを入れてへらで混ぜる 最後にラップで包むとした。材料や調理器具を取りにくるのはお父さん お母さんだけでなく 全員が取りに来れるように配慮した。ボールに入れたさつまいもをマッシャーでつぶす時はボールをしっかり押さえしていないと動いてしまうので2人で協力して行うようにした。その中に入れる砂糖と干しぶどうの量は グループ内で相談して決めた。この混ぜる工程も協力して行った。いもきんとんを包む活動では 一人一人が好きな形を作ることができ その子なりに楽しんでいた。テーブルの上には色々な形や大きさのいもきんとんがたくさん並び みんなでおいしく味わった。

たのしいクリスマス (11月～12月)

11月下旬になり 1か月後の小学部「クリスマス子ども会」に向けて その雰囲気盛り上げ みんなで準備していこうということになった。鈴やタンバリンを使った歌 自分たちでラッピングしたプレゼントを使ったゲーム クリスマスツリーの飾り付け キャンドルサービスなどをグループの友達と協力して取り組むことで「クリスマス子ども会」への期待感を高めていきたいと考えた。

配 時	1	2	3	4	5	ク リ ス マ ス 子 ど も 会
うた・リズム	<div>あわてんぼうのサンタクロース</div>					
つくる活動	<div>パネルシアター</div>		<div>飾り・ツリー</div>			
ゲーム的活動	<div>プレゼントを届けよう</div>			<div>キャンドルサービス</div>		

①歌「あわてんぼうのサンタクロース」

毎回最初に この季節に子どもたちが親しんでいる「あわてんぼうのサンタクロース」を歌うことにした。また導入として 雰囲気を盛り上げるためにパネルシアターを取り入れた。擬音部分は鈴 小太鼓 カスタネット タンバリンを使って演奏も楽しむことにした。

②プレゼントづくり

クリスマスに欠かせないプレゼントを作る活動に取り組んだ。大きな箱を子どもたちが家から持ってきた包装紙で包むことにした。初めに教師が 箱を包装紙で包み その

上にクリスマスに関係した折り紙や絵を貼り リボンで縛ることを見せることによって活動の見通しをもたせると共に子どもたちのやりたい意欲を高めた。協力して作業できるように二人で1個のプレゼントを作ることにした。出来上がったプレゼントは みんなの前で披露して作った喜びを味わった。

③プレゼントを届けようゲーム

前時に作ったプレゼントを使って「プレゼントをとどけよう」というゲームを楽しむことにした。プレゼントは表現会に演じた白雪姫に届けることにした。劇で使用した小人の家も使った。

ルールは2チームに分かれ 子どもたち二人がそれぞれサンタの帽子とトナカイのお面をかぶり サンタクロース役とトナカイ役になり協力して白雪姫に届けるものである。トナカイ役はソリに見立てた箱車に乗ったサンタクロースを引っ張って白雪姫の家の前に行きノックをする。その後 サンタクロースが白雪姫にプレゼントを渡すことにした。チーム対抗のリレー形式で行うことで他チームとの競争意識をもたせることもねらった。ペアによって引っ張るのに時間がかかり勝敗の行方もそこで左右されることが多いので見ている子どもたちの応援にも熱が入り盛り上がった。

④飾り・ツリーづくり

「クリスマス子ども会」の会場であるホールに飾るため 大きなクリスマスツリー作りに取り組んだ。底辺60cm 高さ170cmの三角形の緑色の厚紙を木に見立てた。材料や飾りは星や家が途中まで切ってある紙 モール 色紙 セロハンテープ はさみ のりを用意し各グループが創意工夫して飾りを作ることにした。出来上がった4つのツリーはつなぎ合わせ大きなツリーにした。



「いち、にの、よいしょ」

た。そのツリーを組み立てるときに リーダーのお父さんお母さんに持ってもらい貼り合わせたあと代表の子どもと教師が脚立の上に乗って大きな星を飾りつけた。最後に部屋を暗くして 教師が豆球のスイッチを入れ 色とりどりの光がつくと 子どもたちから「わあ～っきれい！」と歓声があがった。

⑤キャンドルサービス

クリスマスツリーが出来上がったところでキャンドルサービスを行った。雰囲気盛り上げるために 暗くした部屋で白い布をまとった火の神から火をもらった。グループ毎に一人ずつ火をともしたキャンドルを持ち 「聖夜」の曲に合わせてしずしずと歩いてホールを一周し 次のグループにキャンドルをそっと手渡すという活動である。グループのお父さんを先頭に お母さん お兄さんというように一列になって歩くことでグループ内の役割の自覚を促し まとまって活動する意識を高めたいと考えた。

(島 清 徳 能 村 重 信)

（４）小学部のさいばい活動について

「さいばい」活動では子どもたちがよく知っていて 栽培しやすい作物を選び年間計画を立てた。北陸ということから 栽培の期間は４月から７月 ９月から12月前半とした。３学期は雪が降り温室がないため一部の植物を除き小学部では栽培は不可能と考える。このような条件を考え 学期単位で収穫できるように 植える時期を考慮した。

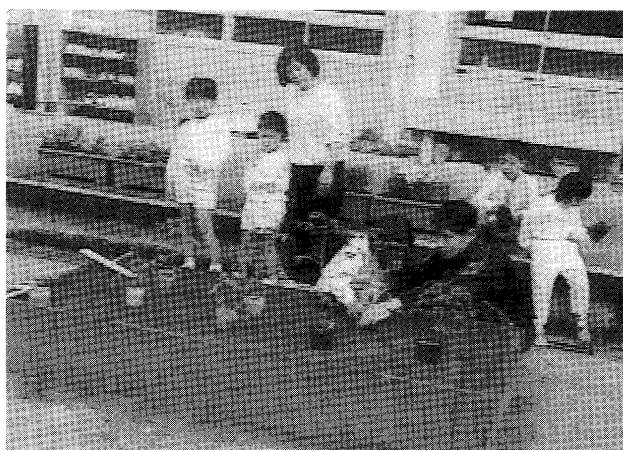
①小学部における野菜栽培について

子どもたち自ら植えた苗が日々成長し 自分の身長よりも大きくなりやがては枯れていく。その経過を観察することは 生命の尊重にもつながると考えた。

実の色や大きさの異なる野菜がどんどん大きくなる様子を見て 収穫の期待を膨らませることが出来る。

日頃から写真・絵本 店で売っている状態の野菜しか見る事のない子どもたちにとって本物に触れるよい機会である。

１学期は野菜を栽培しやすい時期である。そこで 成長が早く 実がどこになっているか見つけやすい夏野菜を栽培することにした。野菜は４つの色に関係したものを選択した。選択にあたっては各グループの色が入っている



「おおきくなってね」

て 子どもたちがよく知っている野菜を植えることにした。苗は子どもたちが植えても折れないくらい太い茎のものを購入した。各グループの野菜は 表Ⅱ－３の通りである。

２学期は残暑から冬に向かう時期である。１学期とは野菜の種類を変更することにした。土の中で育つ野菜は今まで収穫祭等で経験したさつまいもだけでなく 野菜によって色や大きさが異なるものがあることを知り 掘ったときの喜びを味わわせたいと考え根菜類を選択した。根菜類は種を蒔いた時の状態と収穫する時の状態が異なる。苗から育てた場合と違い 芽が出て 双葉が出て 伸びていく変化を 気づかせたり知らせるよう配慮した。

各グループの野菜は色にこだわらず選択し 表Ⅱ－３のようになった。青グループのなすは秋なすを収穫するので継続することとした。

表Ⅱ－３ 「栽培計画」

グループ	１学期野菜	２学期野菜
黄	トウモロコシ	野沢菜
赤	プチトマト	ラディッシュ
白	かぶ 大根	大根
青	なす	なす 人参
共通	スイカ さつまいも	さつまいも

②種まきについて

小学部では自作の花壇を使用した。子どもたちの中には手指を使って種をパラパラと蒔くことが難しい子が多い。そこで種を蒔くときは 次のような順で行った。

つま先を花壇に当てて立つ→手のひらに適量の種を乗せる→手首をひっくり返す→指で土の表面を軽くかきまわす。

数人で蒔くことにより 種は一部分にかたまらずに ほぼ全体に蒔くことができた。また 表面を軽くかきまわすことにより 楽しみながら適度に覆土が行えた。

発芽前の花壇は子どもたちにとって格好の砂場になると考え 掘り返されないように指導した。軟らかい土なので掘ることに興味を持つ子もいたが 半分程度発芽すればよいと考えたので その都度掘られた部分を教師が元通りにした。

③野菜の収穫と扱いについて

グループの野菜は原則的にそのグループが収穫することにした。しかし なすは適期を逃すと大きくなりすぎるので グループの許可を得て気がついた教師と子どもたちが収穫を行った。収穫した作物は子どもたちに分け持ち帰ったので 家庭での調理の様子や味についての感想が連絡帳によく書かれてあった。それを子どもたちに伝え 次回への意欲につなげた。

- ・ トウモロコシは育苗箱で種から苗を作った。実際に食べている部分が種なので 子どもたちは興味を持って種まきができた。成長が目に見えて早く 子どもたちの身長よりも高くなるので興味をもって栽培することができた。収穫が夏休みになったので 食べることはできなかったのは残念であった。

- ・ プチトマトは6月から9月まで長期間栽培でき 黄色い花から赤い実へと変身する。たくさんの小さな実がなり 収穫してから洗ってすぐに食べることができるなど教材として扱いやすい野菜であった。

- ・ なすは6月から10月まで長い期間収穫が行えた。何回も収穫できたのでどれを取ったらよいかを 選択出来るようになった子がいた。また 学校で飼育している鈴虫の餌として「ボク つくったの あげる」と言っていた子もいた。



「箱に入れてよ」

- ・ スイカは実がつき始めた小さなときからスイカの模様があるので 子どもたちは興味をもつことができ 早く大きなスイカを食べたいという期待感が増した。一つのグループの苗が枯れてしまったとき 子どもたちと相談しもう一度苗を植えることにした。収穫前に学校周辺にいるカラスに食べられてしまったのは残念であった。
- ・ さつまいもは 苗の植え方を子どもたちの前で見せた後 教師と一緒に植えることにした。手で軽く掘り そこに苗を寝かせ土をかけるという手順である。収穫は赤土の畑に植えた例年と異なり 園芸用の土を使用したので つるを引っ張るとほとんど切れるこ

となくさつまいもを抜くことができた。一人で抜けない場合は 「おおきなおいも」の歌の通り もう一人を呼び協力して抜くようにした。歌の登場人物に替えて子どもたちの名前を入れて歌うことにより リズムに合わせ二人の力が重なって 抜けたときの喜びも大きくなったようである。低学年のほとんどの子は高学年の子と協力して抜いていた。さつまいもの中には大根くらいの大きさの物があり 掘った子は嬉しさのあまり高々と持ち上げみんなに見せていた。

- ・ラディッシュは大きなものでピンポン玉位に成長していた。大きくなればなるほど亀裂や鬆(す)が入ったりするが 大きくて赤いラディッシュは子どもたちの目に入りやすく また根が細いので抜きやすい野菜であった。
- ・野沢菜は60～70cmになった頃を目安として収穫した。野沢菜は葉が大きく 新鮮な葉のチクチクした感触を嫌がる子がいた。葉を痛めないように根元を持って抜くように声かけをしたり手を添えたりしたが 大きな葉に目がいって葉先を引っ張るのでちぎれてしまうものがあった。
- ・大根は1・2学期の2回収穫した。1学期の時は花壇の外から抜くように子どもたちに指導したため 中心部の大根は斜めにしか引っ張ることが出来ず途中で折れてしまうものが何本かあった。その教訓を生かし 2学期は途中で折れないで抜けるように配慮した。大根の収穫本数を決め少々斜めに引いても折れないくらい大きく成長するまで待つことにした。また花壇の都合上 中心部の大根は背の低い子には手が届かないので 背の高い子用とした。子どもたちはタワシを使って洗い 黒っぽい色からまっ白になるので興味をもって取り組んでいた。抜いた大根は1本ずつ家に持ち帰ることにした。
- ・人参は市販のものほど大きくはならなかったが 抜いたときに赤い色が土の中から出てくるので 抜いたときの感動が大きかった。

④球根植え

冬は外で花を栽培することができない。そこで一人1個ずつヒヤシンスもしくは水仙の球根の水栽培を行うことにした。水栽培用容器に 自分の名前の書いたシールが貼られた長方形の黒い紙を容器に巻き付けた。容器に紙を巻き付けるとき 一人でセロハンテープを貼ることが難しいので 友だちと協力して行った。水は学級で入れ 学級単位で観察することにした。水栽培は芽から根まで見ることができる。根の伸び方が面白く 子どもたちは他の子の根もよく見ていた。チューリップの球根植えは 植え方を説明し 学級で植えることにした。



(島 清 徳 能 村 重 信)

ランランタイムのうた

作詞作曲 小学部

さ あ さ あ は じ め よ う

な か よ し ラン ラン タイム

う た ご え た か く

げ ん き な こ え で お へ ん じ し ま しょう

き い ろ い ちょうちよさん は ー い ラン ララン ラン
し ろ い うさぎさん

ラン あ か い くる ま さん は ー い
あ お い こと り さん

ラン ララン ラン ラン み ん な が あ つ ま っ て

は じ め よ う た の し い た の し い

ラン ラン タイム

（事例Ⅰ）赤いくるまグループ

ささやかなかわり合いを積み重ねていくことで

ペアの子を意識するようになったE男（6年）

① 人への関心が薄いE男

E男は6年生。まわりの友達や先生など 人に対する関心が薄く 気になる友達は同年のH男だけである。このH男との関係は 二人で向かい合って肩を抱き合ったり 顔を寄せたりという 高学年としてはふさわしくないかわり合いであり 一緒に遊びを楽しむということはほとんどない。E男の休みの時間の遊びといえば 屋内ではひたすら廊下をゴーカートをこいで走り回ること 外では自転車に乗って運動場をグルグル走ることである。教室にパソコンが置かれたときは キーボードを上手に操作して簡単なゲームを楽しんでいる姿が見られたが 他の子とかかわり合って遊ぶということはきわめて苦手である。

昨年度 E男は「青いことりグループ」の一員として活動に参加していた。青グループの子どもたちは物をつくるのが得意であったため つくる活動を通してグループの仲間を意識していくことをめざしていた。そのメンバーのなかでも特にE男は器用に上手につくることができ それを共同製作の中で活かすことでグループの仲間と一緒に楽しく活動に参加できることが多くなっていった。

今年度は 最上級生となり 縦割りグループのリーダーとして頑張っていく立場となったため E男にとって苦手な 人へのかかわりを少しでも広げていくことをめざすことにした。

② 赤いくるまグループのメンバーとペアづくり

E男が所属する赤グループの他のメンバーの実態は 次の通りである。

A男（1年） 1年生ということで 学部という大きい集団での学習に慣れていない。友達への意識は薄く 同じクラスのB子と手をつないで歩くことが少しできるようになったところである。

B子（2年） 人とかかわって～したいという気持ちは強いが うまく伝えることができないため わざと座席から飛び出し立ち歩いたり 突然泣きまねをしたりする。活動に興味関心があるにもかかわらず 意識的に体を固くして動かなくなるなど 集団の中では自分を出しきれないでいる。

C男（3年） 活動に集中できず椅子に座っていても体が半分後ろ向きになり 教師に手遊びをして欲しがったりする。同じクラスの慣れた友達とは少しかわりがもてる。

D子（4年） 教師や同じクラスの友達とは積極的にかかわるが グループの他のメンバーとはまだ慣れておらず 進んでかわることは少ない。昨年度はグループのリーダー（お母さん）として活躍し 自信もでてきたように 今年も意欲満々である。

このようなメンバーが集まった赤グループは リーダーを中心にして「グループの仲間を

意識しながら「楽しく活動に参加できる」ことをめあてとして取り組んでいくことにした。

グループのめあてを達成するために グループの5名がより密接にかかわることができるようペアをつくろうということになった。人とかかわることが苦手なE男のペアとして対人意識十分なB子が考えられたが B子自身にとっては より良い手本になりうるD子とペアを組んだ方が効果的なように思われた。A男は動きがすばやく E男の手にあまることも予想され 本人もまだ学校生活に慣れておらず 教師と一緒に活動に参加していくことが適当ではないかと考えられた。そこで 昨年まで2年間 部朝の会の経験があり動きもゆったりしているC男をペアにすることに決めた。E男個人のねらいとしては「C男とペアの意識をもち かかわり合いを育てる」とした。

こうしてスタートしたランランタイムであったが E男とC男のペアは予想以上に一緒に活動することがむずかしかった。3年生になったC男は我がとても強くなり 自分の思いと違うことに関しては E男が誘ったくらいでは動かないことがよくみられた。C男自身の自我の成長に対し E男はどのようにかかわってよいかわからずとまどっているようであった。そこで C男については教師とのかかわりをふやすことにし ペアを変更することにした。だんだんランランタイムにも慣れてきて 活動にも少し見通しをもって笑顔で参加することができつつある1年生のA男と新しくペアを組むことにしてみたのである。したがってE男のねらいは「A男とペアの意識をもち かかわり合いを育てる」と変更された。

③ ペアの意識を育む手だてとE男の様子

・座席を決める

ランランタイムではグループ毎に座り 各グループの位置も決まっているが さらに赤グループ内においても並んで座る順序を固定することは お互い意識していく上で大切な要素であると考えた。まず 4月当初は各自が好きな席に自由に座ってもよいことにしばらく子どもたちの様子をみながらいろいろ試行錯誤した。その上で設定した座席は次の通りである。ペアが隣同士に座ると共にリーダーのD子・E男の両側に低学年の子を配置し リーダーとしての意識も合わせて育もうという意図である。

白 グ ル ー プ	B 子	D 子	A 男	E 男	C 男	黄 グ ル ー プ
-----------	--------	--------	--------	--------	--------	-----------

図Ⅱ－3

・名前を覚える

座席に座ったE男に対し 隣のA男の体操服の胸の名札を教師が指差しながら「A男君」と読んで A男の名前を覚えさせることにした。耳から入る言葉よりも文字で書かれたものの方がE男にとって覚えやすいからである。促されて「A男」と自分でも読むE男に「そうね お隣にいるのはA男君よ」などと応えて確認させることを毎回繰り返してみた。そのうちE男もその名前に親しんできて 人物と結びついたようだった。

・ A男と手をつなぐ

座席に座っていてもピョンピョンととびはねて落ち着かず すぐに立ち歩いてしまうA男を 初めは教師が席へ連れ戻していた。この役をペアであるE男に任せることにした。A男が出ていくとすかさず後ろから「A男君を連れてきて」と教師がささやいて促した。初めのうちはその声でさっと立ち上がっても 次にどうしてよいのかわからなかったE男であった。「手をつないでおいで」と言われてもそばまで行くだけでA男になかなかさわれない。教師がE男の手をとってA男の手とつながせ「こうして連れてきてね」と教えるところから始まった。だんだん度重ねていくうちに声かけだけでなんとかA男を連れて席へ戻ってくるE男の姿が見られるようになってきた。そのうちA男もとび出した後 E男に追いかけることがうれしくて 身をおかわしては逃げ回るようになり そのすばしこさに振り回されて手をつなげずにいるE男のとまどう表情がみられるようになった。そんな場合は「グューッとしっかり手をつないで！」と励ましながら A男の動きを制し手をつなぎやすく援助したりした。

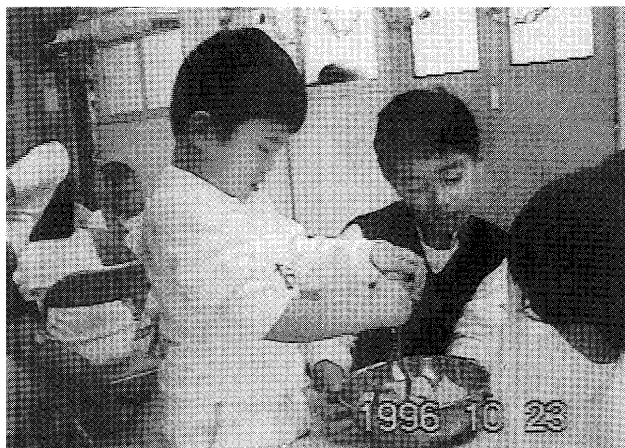


「A男くん おいでー」

・ いつも一緒に活動する

活動の中でペアで取り組む場面があれば「E男君はA男君と一緒にね」と声かけして意識させるようにした。またゲーム等で前に出る時やテラスへ移動する際にも「A男君を連れていってね」と促した。

いもきんとんづくりでは E男がさつまいもの入ったボールを押さえ A男がマッシャーでつぶすという協力し合う様子が見られた。さつまいもほりや大根ぬきでは葉っぱに触るのが苦手で 尻込みしながら指先で葉をつまむようにしているA男を 「一緒にしてあげて」の声かけで手伝うE男の姿が見られた。クリスマス为主题にしたプレゼントづくりでは一緒に一つの箱をラッピングし セロハンテープでとめて素敵に仕上げていた。ペアでするいろいろなゲームではいつも二人一緒に楽しく頑張ることができた。

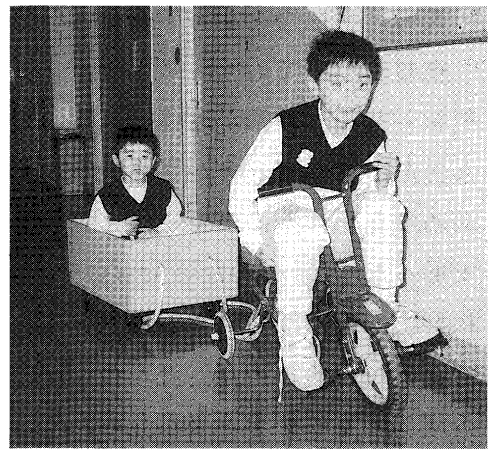


「いもきんとん つくるよ」

④ ランランタイムの枠をこえて

ランランタイムをきっかけにペアを組み 共に活動することを積み重ねてきたE男とA男であるが それ以外の場面でもお互いを意識できるよう 機会をとらえて働きかけてき

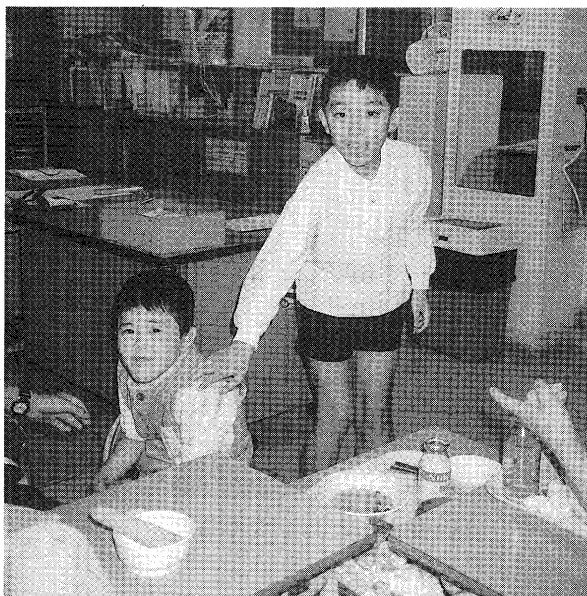
た。週2回ある全校集会のリトミックでは 二人が
手をつないで走ったり ゲームでペアを組んだり
し 運動会の団体競技「アンパンマンをたすけよう
リレー」では息の合った頑張りを見せてくれた。遠
足では A男とE男がうれしそうにアスレチックの
階段を昇り 長いローラーすべり台をすべる遊び
を 何度も繰り返していた。教師が「E男君 A男
君を待っててあげて。いっしょにすべろうよ」と声
をかけると 階段の上で立ち止まり下から来るA男
の方を見て「A男君 おいでー」と声をかけるE男



「しゅっぱーつ! キャスターカー」
に驚かされた。長休みにE男がこぐゴーカーに箱キャスターをつけて「A男君を乗せて
あげようか」と働きかけると 嫌がらずに足に力を入れてこいで引っ張る姿も見られた。
廊下を曲がるときには後ろのA男を見ながら 壁にぶつからないように気をつけて大回り
するようになった。A男だけでなくB子も乗ってきても同じように遊べるようになった
ことは E男の友達への意識がわずかずつ広がってきているあらわれといえるだろう。

人とかかわることが苦手なE男であるが このように一人の友達とささやかなかわり
合いを積み重ねていくことで 相手への意識が育ち それがきっかけとなり他の子との間
にもかかわりが広がっていく様子が見られた。自分のクラスではリーダー性を発揮できる
場面がなかなかないE男にとって ランランタイムが縦割りグループであり そのなかで
小さい子と一緒に活動できたということも良かったといえる。まだまだ教師の援助が必要
ではあるが かかわる相手や場面等を少しずつ広げていくことがE男にとって大切である
と思われる。

(神 谷 みつ江)



「給食 がんばってね!」



「A男くん だっこ」

（事例Ⅱ）白いうさぎグループ

教師が活動や友達との間をつなぐ役割を担うことで

自分からのかかわりが増えてきたF男（3年）

① 受け身の態度が多いF男

F男は3年生。ジャングルジム ジャンピングボードなどの遊具や 水遊びなどを好み 休み時間は一人で遊んでいることが多い。自分から友達に対してかかわることはほとんどなく 同じクラスの友達からのかかわりも少ない。また 時折教師に対しては要求を出す が その際 単語程度の言葉はもっているものの 状況に応じて使うことが苦手であり 相手の顔を見て「あっ あっ」と言うことで伝えようとしている。F男からのかかわりは少ないが 人への関心はもっており 教師からの働きかけに対しては喜んで応じることもある。授業中は 手を叩いたり立ち上がるなどその場の状況に合わない行動をとることが多く 課題に対してあまり興味を示さない。またF男の興味ある内容に対しても自分から活動に参加することは少ない。

ランランタイムは クラスの枠を越えた友達とのかかわりが期待できる場である。そして内容もF男が興味をもっている音楽や食物 土いじりや水やりなどの活動がある栽培が取り入れられている。そこでランランタイムという集団学習のなかで教師が個別的にかかわっていくことで 自分から友達にかかわる 自分から活動に参加するといったF男自身からのかかわりを増やしていきたいと考えた。

② 白いうさぎグループのメンバー

・白いうさぎグループのメンバー

J男（2年） 活動には関心をもっているが 参加する際 少し抵抗を示すことがある。教師や特定の友達とは簡単なコミュニケーションをとることができる。

I男（4年） 興味をもった活動には落ち着いて参加する。教師とかかわることはできるが友達とは難しい。

G子（5年） 活動には意欲的に参加する。関心をもった友達には積極的にかかわろうとするが 多少行きすぎることもある。今年リーダーになったことをしっかり意識し 喜んでいる。

H男（6年） 活動には意欲的に参加する。友達や教師に対して関心をもっているが どのようにすればよいのかわからず かかわりかたは苦手である。今年度はリーダーとなるが あまり自覚していない。

③ F男とG子のかかわり

G子は5年生。活動には意欲的に参加する児童で 今年白組のリーダーとなったことをしっかり意識し 喜んでいる。関心をもった友達には積極的にかかわろうとするが 多少行きすぎることもある。G子は4月当初からF男に関心をもっており かかわろうとする

姿が見られた。そこで G子とF男をペアにして 座席を隣同士にしたり 一緒に活動する機会を多くもつことで この二人のかかわりに期待した。

④ 教師のF男へのかかわり

ランランタイムの中でサブとしてF男の後にいる教師は 様子を見ながら次の3点に留意してF男とかかわった。

- ・子ども同士をつなぐ役割 ～F男とG子のかかわりの中で～

G子といろいろな活動でペアを組むことで友達と一緒に活動できるようになってほしいと思い G子のF男へのかかわりに期待していた。G子は同じクラスになったことのないF男に関心をもっており 「F男のとなりに座る」というように積極的なかかわりを見せてくれた。教師も二人の様子を見ながら「いっしょやね」「いっしょにつくったね」といった声かけをした。また『『ちょうだい』って言おうね』といった形でF男に伝えるなどF男の様子から教師が意図を読み取ったときはことばのモデルを示し 同時にG子にはF男の気持ちを教師が代弁することで伝えた。このことをくりかえしていくことで二人のかかわりをつなげていきたいと考えた。

- ・F男のサインを受けて

活動のなかで「やりたい人！」と言われてもF男はすすんで手をあげようとしているようには見えない。しかしわずかに手を挙げる様子や表情などで 活動に参加したいという気持ちを表すことがあった。このサインは前にいるメインの指導者からは見つけることが難しい。そこでこの見落としがちなサインを側にいるサブの教師が受けてメインの指導者につなぐことで 自分からの働きかけが伝わったうれしさを味わうことができると考えた。

- ・共感的なかかわり

場面に応じて声かけをするときに共感的にF男にかかわることを心がけた。F男が興味を示したときなどは「おもしろいね」といったことばかけをし 顔を見合わせるようにした。またF男からの反応が見られないときでも 教師がこの活動を楽しんでいることを伝えるようにした。特にF男が好きな歌などは教師自身が歌うことを楽しみ 時折F男の顔を見るなどした。そうすることで「今このことをしなくちゃいけないんだよ」という指示的な言葉かけより「この歌 とても楽しいね」という気持ちの共有をしたかったのである。そしてF男に対する声かけはゆっくり あまり言葉数が多くならないように気をつけた。

⑤ F男の様子

- ・G子とのかかわりの中で

一学期はG子からの一方的なかかわりが多かったが 二学期最初のぶどうづくりの中では 一緒に活動しているF男の姿が見られた。セロファンで包んだ新聞紙をもつ係 セロハンテープを貼る係 とそれぞれの役割を担って 一つのぶどうを作っていた。G子からの働きかけで始まったのではあるがF男がそれに応えたのであった。F男がG子とのペアに慣れてきたこと G子がF男が何をすべきかをしっかりと伝えていたことで一緒に活動することができたのであろう。

また一学期にはG子が時折行き過ぎた
かかわりをして F男が嫌がっている場
面があった。そのたびに「あっあっ」と
教師に伝えてくるF男に対して『「やめ
て」って言おうね」とモデルを示した。
二学期のある日G子に対して「やめて
やめて」と自分でことばを使って伝えて
いるF男の姿が見られた。「いやだ」と
いう気持ちをことばで伝えられたこと
は 友達とのかかわりを広げていくうえ
で大きな一歩と考えられ 驚きと嬉しさを感じた。



ぶどうづくり

・ランランタイムの様子

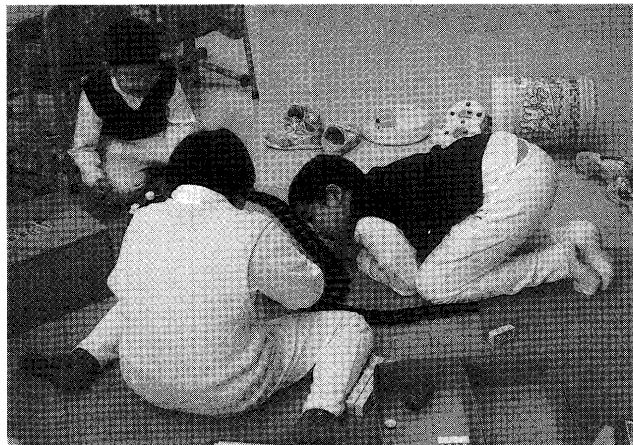
活動を説明しているとき 顔を上げ前にでている先生を見て話を聞いていることが増えてきた。またランランタイムの歌では「白いうさぎさん」のフレーズになるとメインの教師としっかり顔を合わせるようになった。ランランタイムで歌った歌を口ずさんだり さいばい活動での水やりが気に入る そのまま休み時間もじょうろに水を入れテラスにまいて遊んでいることもあった。

クリスマスにむけての歌「あわてんぼうのサンタクロース」では歌の途中に振り返りとても楽しそうな笑顔を見せてくれた。手でリズムをとりながら振り向いて見せてくれた笑顔は「たのしいね」と伝えてくれているようであった。

・学級での様子

普段の生活のなかで使い方を学んできた「とって」「あけて」などのことばの他に 簡単なしぐさや身体を使って自分の要求を伝えることが増えてきた。自分がこうしたいという思いを強くもつと それを伝えようとしている。クラスの友達と遊んでいる教師の側にいきその友達の名前を呼びながら軽く押し退け 教師の手をひっぱってブランコのところまで連れていき「おして」ということもあった。「ブランコで一緒に遊ぼう」ということを伝えなかったのであろう。また 水で濡れた洋服を替えたいということを「びちょびちょ」ということばを自分で考え伝えてくれたこともあった。

12月のある日の休み時間 教室に敷かれたじゅうたんのうえで横になっていたF男の側でクラスの友達がブロックをもってきて遊び始めた。するとF男は起き上がり 側にいた教師にむかって大きな声で「あっあっ」と言ったのである。ブロックと教師の顔を交互に見て声をだすことで「ぼくこれで遊びたいよ」と伝えようとしたのである。そこで教師が間に入り「F男くんも一緒に遊びたいん



「おもしろそうだな」

だって」と代わりに伝えることで F男はブロックで遊ぶことができた。今まであまり友達の遊びに興味を示さなかったF男が このように伝え 友達のブロックを動かす手の動きを目でずっと追っていたことは嬉しいことであった。

⑥ かかわりをひろげるために

F男はランランタイムのなかで少しずつではあるが友達を意識したり 活動に対して自分からの行動を増やしつつある。またそれは普段の生活のなかにも見ることができる。友達に関心がないのではなく どうかかわっていいのかわからない 活動に無関心なのではなくどのように参加していけばよいのかわからない そのような子どもたちにとって 活



一緒にプレゼントをはこぼう

動や友達との間を結ぶ教師の役割の大切さを感じた。これからも友達や活動に対するF男のかかわりを長い目で見ていきたい。そして何より教師自身がもっと意識して子どもたちにかかわっていきたいと考えている。

(森 佳 子)

（事例Ⅲ）黄色いちょうちょうグループ

細かい配慮のもと

自分らしさをだして活動できつつあるM男（5年）

① 黄色いちょうちょうグループとM男

昨年の実践では「かかわりの芽を持ちつつもぼらぼらになりがちな黄色いちょうちょうグループがリーダーの成長と共にグループのまとまりが出てきた」ことを報告した。

M男はグループの中では「お兄さん」になっているが、じっと指示を待っていることが多い。かかわり方は一方的で孤立しがちであったが、今年になり少しグループの輪の中に入れるようになってきている。反面、身長が伸びグループの中で一番大きくなったので、今まであまり気にならなかったゆったりした動きや指示を待っている姿が目立つようになった。

そこで今年は友達とかかわりながら、もっと自主的に動いて、将来グループのリーダーになってほしいとの願いからM男を見ていくことにした。

なお黄色いちょうちょうグループのメンバーは次のような子らである。

O男（1年） はじめてのことが多いので活動に慣れず、耳に手を当てて泣くことがあったが、少しずつ落ち着いてきている。動きがゆっくりしているのでもM男とペアを組ませているがあまり関心がない。

N男（3年） 食べ物・折り紙など興味のある活動には身を乗り出して参加するが、少しでも興味が薄れると立ちあがって席を離れる。友達よりも教師とのかかわりを求める。

L男（4年） グループの「お父さん」としての意識があり、みんなの中心になって活躍している。しかし手足に軽いマヒがあり体も小さいため、リーダーシップをとるのにマイナス要因となっている。

K子（6年） グループの「お母さん」としての意識があり、みんなをリードしている。主にN男の世話を進んでする。

② M男の動きとねらい

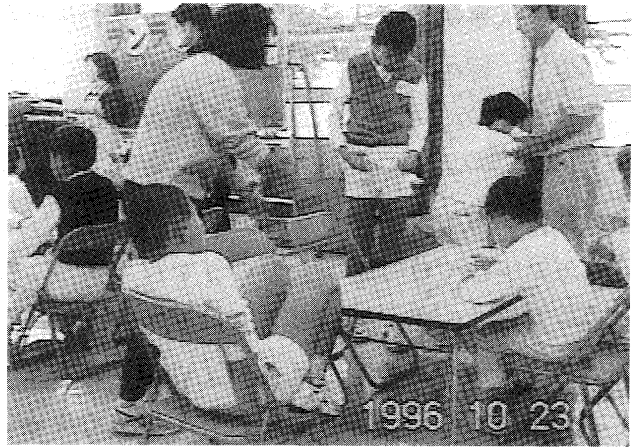
M男は、比較的落ち着いており、泣くなどの目立った行動も減ってきている。「すわっていなさい」と指示すればずっと座っているようなところもある。よほど注意をしてみないとM男の細かい動きを見落としてしまう。

ビデオで、椅子に座って話を聞く時間の様子を見ると、腕を頭に回したり手をこすり合わせるなど常に腕や手を動かしている。また頭を股下にうずめるようにするなど下向きの姿勢が多い。グループの友達に自分からかかわろうとする姿は見られず、他のグループの特定の子や泣いたり教師に注意されている子に関心がいく。

このようにM男は、一応座席に座っているが話に集中している時間は短い。

そこで昨年の様子も踏まえ、M男のねらいを「配る係りを通して活動に見通しをもち進んで参加する」「お兄さんとして1年生O男とかかわる」とした。

ここで配る係りとしたのは 自分だけでなくグループの一人一人に物を渡すという活動を通してグループのメンバーを意識してほしかったからである。またM男は一人の子に渡すとそれで仕事が終わったと思い 指示を待つ姿がみられるので 次に渡す友達 また次の友というように活動につながりを持たせたいと思つてのことである。



「お兄さんとして1年生O男とかかわる」としたのは動きのリズムがよく似たO男とならば「される・してもらふ」という受け身のかかわりではなく「する・してあげる」という能動的なかわりができるのではないかという期待からである。

スイートポテト作りで
ラップとフライ返しを持ってくるところ

③ M男らしさの理解と「らしさ」をいかした活動場面

ボードにペンキを塗るという場面では 刷毛を2～3回動かしてトントンと叩いておしまひである。まだ周囲に塗ってないところがたくさんあつても次の指示を待っている。このように一つの作業を長く続けることが難しい。野菜や花壇の水やりは好きなのだが同じ場所に水をやり続けていることが多い。また「エイ・エイ・オー」でこぶしを上げる時 ワンテンポ遅れて手を上げる。歩き方のリズムもゆっくりしている。

このように動きが単発的・部分的で反応のリズムもゆっくりしているということがM男の動きの特徴となっている。また初めての歌や活動には戸惑いがあり 回数を増やし一定時間繰り返すことによりできるようになることもわかってきた。

かわりの面でみると友達の失敗や泣いたりしている姿には興味を示す。また大人の指示を待っていることが多い分 指示されたことは素直にする。身を乗り出して進んで参加しようとする活動は 歌やリズム遊び 食べることなどである。

そこでこのようなM男の「らしさ」と行動・認識特徴をいかした活動場面を設定した。

- ・ 食べることが好きなので みんなで一緒に食べる活動（ティータイム）を取り入れ お手本となつてもらう。
- ・ 長続きしないので 1～2回手を動かせばパッと仕上がるような作る活動を本児にさせる。
- ・ 人には興味があり 名前などわかつてるので配布係になつてもらい「～にあげる」「～からもらってくる」というような場面で活躍させる。
- ・ 自ら声をかけるなど能動的なかわりを期待して 一年生のO男と座席を隣にしてかわる機会を増やす。

④ 援助の仕方の工夫

上記のような場面設定と合わせて次のような点を留意しながら援助した。

- ・繰り返し行うことが大切と考え ゲームなどで役割交代の時もM男の組は交代しないで行うなど同じことを他の子らよりも回数多く行わせるようにした。
- ・反応がゆっくりしているので それにあわせる。間をおいて考える時間を作ってあげるようにした。

例えば「～したい人」といって手を上げる場合でも遅れがちになるので「～グループと～グループのどちらにしようかな。手を上げて下さい。」という少し長いフレーズで話しかけることによって 考える時間が持てるようにした。

- ・メインとサブがボールを受渡しするように 連携プレーで援助するようにした。例えばメインがみんなに話していることを受けて サブがもう一度本児に言ったり「～先生のところからもらってきてね。」などのことばかけをした。
- ・テープはり ペンキ塗りなど単純作業でも根気よく続くように「まだまだ シュッ シュッ」「1・2・3………10」など声かけをした。
- ・O男とのかかわりが難しい場合は 間に教師が入って つなぐように援助した。例えばいも掘りの際にはM男とO男の二人で力を合わせることが難しいので 教師がO男の介助をする形で入り三人で行った。いもはこびゲームでも初めは三人で運ぶが後半は二人で運ぶようにさせた。
- ・O男のせわを教師ではなく なるべくM男にさせるようにした。



まだ まだ シュッ シュッ

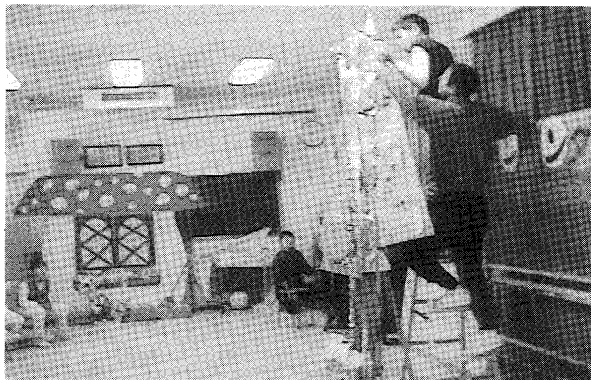


三人でうんとこしょ

⑤ クリスマスツリーのてっぺんに星をとりつけたM男

このような配慮のもと 少しずつではあるがM男に変化が見られるようになってきた。

例えば指示を待つことの多いM男であるが掘った大根を包む時は 大変意欲的で指示が



チョットこわいけどやってみる！

なくても包み紙に名前を書いた。また「O男を連れてきて」というとO男の前に行って手を出している姿も見られるようになった。圧巻だったのはクリスマスツリーの一番高いところに星を飾るという大役を進んでしたことである。脚立に上ることはK男にとってどんなに緊張することであつたろう。見ている皆から「がんばれ」の声援があがり星をつけ終った時は拍手がわいた。

⑥ 話し合いの中から

M男の場合 その変化を「ランランタイム」の中だけや1～2学期と言う短い期間で見ることにはなかなか難しい。全職員で話し合うことで 一人では見えなかった部分も見えてきた。例えばよく泣いていたけれど泣かなくなった。前を見て話を聞いている時間が長くなった。家で学校のできごとをよく話している。一年生の女の子に「Bちゃん元気か」と声かけたり友達の着替えの間違いを見つけて「ハンタイ ハンタイ」と言う姿が見られた。自分より小さく弱い友達には積極的にかわわろうとしている。など別の面からM男の成長をうかがい知ることができた。

このような話し合いのもと M男のリズムに合わせ 長い目でみていくこと。M男よりも小さい子とのかかわりや教師との1対1のかかわりを大事にしていくことを確認している。

(浦田 節子)

— (事例Ⅳ) 青いことりグループ —

お父さん役をすることによって

グループの友達への意識が育ってきたP男（5年）

① P男について

5年生のP男は初めての人や場所が苦手である。また 何かにつけ「～でなければならぬ」という思いが強く 思い通りにならないとパニック状態になることもある。学校においても通常の日課が変更になる行事等をなかなか受け入れられず その行事が終わるまで精神的に不安定な状態が続く。人とかかわりという面では 学級内でも自分から他の友達にかかわろうとすることはあまりなく ブランコ 自転車乗りなどのひとり遊びがほとんどである。

昨年度の部朝の会では席を立つことが多く 予定の変更があったり気に入らないことがあると大きな声を出しているのが目立っていた。今年度 4月当初もこの状況はかわらず 席を離れてとびはねたり 大きな声でCMなどを口ずさんだりしていることが多かった。

今年度はこのようなP男が ランランタイムを通じて 同じグループの友達を意識し かかわりながら楽しく活動に参加できることを目指したいと考えた。

② グループにおけるP男のねらいと役割

今年度は P男は青グループになった。新しいメンバーは以下の通りである。

Q男（6年） 活動には意欲的に取り組む。昨年度はお父さん役をしており 下級生の友達をよく世話するようになった。

R子（4年） 活動に関心がないわけではないが 席を離れることが多い。P男と昨年度 同じ学級で 部朝の会でも 同じグループであった。

S子（2年） まわりの先生や友達に関心があり 活動にも意欲的に取り組む。

T男（1年） 学校生活になれていないこともあり 席を離れることが多い。人や物事への関心は高い。

4月当初の青グループは席を離れる子が多く 全体的にばらばらで落ち着きのない状態だった。そこで青グループの目標を「グループの仲間を意識しながら 楽しく活動できる」とし その中でP男を中心として5人の子どもの横のつながりを育んでいきたいと考えた。

青グループには 昨年度お父さん役をして 活動に意欲的で下級生の世話をよくするQ男がいたが あえてP男をお父さんとした。担任教師間では今のP男にはグループのまとめ役としてのお父さんは無理でも あえてこうした役割を与えることで 少しでも同じグループの友達に目を向けてほしい また 将来的には自分から友達の手助けをできるようなリーダー性を身につけてほしいという思いがあった。それでP男には「お父さんとして 他のメンバーとかかわる」という個人目標をたてた。お父さんになると つくる活動の時などにグループの代表として材料等をもらいにいき 他の友達に配る機会が多くなり かかわり合いをもつきっかけになると考えたからである。

③ 具体的な取り組みとP男のようす

P男がお父さんとして他のメンバーとかかわることができるように 以下のような取り組みを行った。

ア. 見通しをもって活動に参加する～学級との連携など

お父さんとしての役割を果たし 他の友達とかかわっていくには まず P男自身が落ち着いて活動に参加できるということが前提にあった。新しい経験に対応していくことが苦手なP男にとっては 「今から～する」「～がすんだら～する」というように行動の見通しを持ちやすくすることが大切である。

そこで 学級においては前日の終わりの会で ランランタイムの予告をし 当日の朝の会でも確かめを行った。P男もランランタイムという時間割りカードを覚え 「あしたランランタイム」と確かめるように読んでいることもあった。

また ランランタイムでは 導入部分で「1. (はじめに) ～をする 2. (つぎに) ～をする」という形でその時間の活動内容を板書して知らせる。他の授業や遊びの場面でも同じ方法で声かけを行うことが多い。この形はP男にとって理解しやすく 活動に見通しをつけるための大きな手がかりになってきたものと思われる。

このようにランランタイム以外の活動と関連を図りながら 取り組めたことも有効であったと思われる。

イ. 「友達を連れてくる」「配る」「手伝う」などP男の持ち味を生かす

・「友達を連れてくる」

はじめは P男自身もよく席を離れていたのだが グループのお父さんとして あえてR子やT男を連れてきてもらうことにした。「P男くん R子ちゃん 連れてきて」というと P男はすうっと席を立ち ごく自然にR子の腕を取りに行く。R子も P男には素直に応じる。そのうち 「P男くん おねがいね」とか肩に触れて合図を送るだけで友達を連れに行ってくれるようになった。一学期半ばからP男自身 席を離れることが少なくなり 時には何も言わなくても 自ら友達を連れにいくこともあった。このことからまわりの友達にあまり関心がないと思われていたP男が意外にも友達の様子をよく見るようになってきていることがわかった。

お父さんとしてグループの友達を集めてくる活動は P男の「グループの5人がそろっていないなければならない」という強い思いとうまくつながり 友達を連れてくるという活動が定着してきたものと思われる。

・「配る」「手伝う」

このほか 物を配る活動にも取り組んだ。P男は同じグループの仲間を覚え 教師が指示しなくても 一人一人に上手に配ることができた。

また P男には 機会があるたびにグループの友達の手伝いをさせるようにした。いもきんとん作りのおいもつぶしでは 「P男くん ボールおさえていてね」「○○ちゃんと一緒にギュッギュッしてね」等の声かけを受けて ボールを持つ役をしたり マッシャーでうまくつぶせない友達を手伝ったりした。クリスマスのプレゼント作りでも 包み紙を押さえたり セロハンテープを貼ったり 声かけは必要であるものの活動の流れを理解し

て 友達の手伝いができた。

P男は手先が器用で 何をすればよいかさえわかればどの活動にもスムーズに取り組めた。友達の手伝いも嫌がらずにしてくれ他の子どもたちもP男の援助を自然に受け入れていた。

このようにつくる活動の中では P男の持ち味でもある手先の器用さが生かされ P男自身 落ち着いて活動に参加できた。また 助けたり助けられたりする

ことによって 自然にお互いを意識し 認め合うようなグループの横のつながりも育まれた。

以上のような取り組みを行ってきたわけだが 4月当初は自分のことで精一杯という様子だったP男が 一学期後半から二学期にかけて徐々に落ち着いて活動に参加できるようになってきた。グループの友達とのかかわりという面でも 教師の声かけや援助を受けながらではあるが スムーズに活動ができるようになった。

12月の「クリスマスプレゼントをとどけよう」ゲームでこんなことがあった。友達とペアになって行うこのゲームで「P男くん だれといっしょにする?」と聞くと 教師が順に言う友達の名前をじっと聞いていたP男「S子ちゃん」と答える。2回目のゲームで同じ問いかけをすると今度は「T男くん」と言う。2人とも同じグループの下級生の友達である。グループができた当初は他のメンバーにほとんど気持ちが向いていなかったP男が「〇〇ちゃんといっしょにしよう」というふうにグループの友達を意識できるようになってきたのである。

④ 活動をふりかえて

先に述べたようなP男の変容にはいくつかの要因が考えられる。

・持ち味が活かされたお父さん役

はじめは 落ち着いて活動に参加することも難しいP男だったので お父さん役をするには かなりの援助が必要なのではないかと考えられていた。ところが 実際にはP男は友達を連れてくることや手先を使った手伝い活動にスムーズに取り組むことができた。これはこうした活動がP男の思考や行動の特徴に合っており 気持ちに無理がかからなかったからではないかと考えられる。

・P男のよさを引き出せた縦割り集団

ランランタイムは学級集団と異なり 縦割りの集団である。こうした集団の質の違いもP男にとってはよかったと思われる。学級の中ではまわりの友達の動きを見て状況判断していることが多く リーダー性を発揮する機会も少ない。その点 縦割りの集団であるランランタイムにおいては 5年生のP男はみんなの代表になる機会もあり 下級生の友達へも自然に目が向くようになってきたものと思われた。

(原 田 絹 子)



いもきんとんづくり

3. まとめ

(1) 今までの研究をひきついで

昨年は4つの縦割り集団を編成し『子ども同士の豊かなかかわりを育てるために』というサブテーマのもと かかわりをいろいろな角度から見つめた。その中で縦割り集団の大切さが確認され かかわりを育てるための単元の設定や手だてについてかなり細かく議論された。

今年度は 今までの研究を踏襲しつつ それでもなお 「かかわりが難しい子をどうみていったらよいのか」「その子らしさを認め どのように活かしていったらよいのか」「そのための活動内容をどう準備したらよいのか」などに焦点をあてることにした。

(2) かかわりが難しい子への働きかけから学ぶもの

事例の中から どんなにかかわりが難しい子であっても 適切な働きかけがあれば 応えてくれるし その子らしさを発揮して頑張れることがわかった。その際以下のような観点が大切と思われる。

- ・ 漠然とかかわりを求めるのではなく特定の相手（ペア）を意識した継続的な働きかけが大切である。ペアを意識したかかわりが きっかけとなり他の友達へと関心が広がっていった。（事例Ⅰ）
- ・ 教師が子どもに対して どれだけ共感的なかかわり方ができるかが「その子らしさ」を認め活かす上で重要である。また 子ども同士のかかわり方や気持ちの「つなぎ役」をすることが大切である。（事例Ⅱ）
- ・ 子どもをよく観察することにより「その子らしさ」が見えてきて 指導の手がかりを得ることができた。その子に応じた援助の仕方を場面に合わせ具体的に考えていくことが大事である。（事例Ⅲ）
- ・ 少し難しいと思われても あえてリーダーにするところに意味がある。みんながリーダーと認めてそのようにかかわれば りっぱなリーダーになる。目標を持って学級と連携しながら進めていくことが効果をあげる。（事例Ⅳ）

以上4事例に見られるように「誰々が～グループのお父さん役」「この活動ではこの子にここを頑張らせたい」「このことは誰々と誰々が一緒にしてほしい」など役割や目標をもって取り組んできた。すべての教師が一人一人の子どもを理解し みんなでかかわることの大切さを感じている。

(3) さいばい活動を取り入れて～成果と課題～

あさがおの観察など単発的な栽培活動は今までもあったが「季節とのかかわり 自然のもの ほんものとの出会いの中に豊かさを感じる」というねらいのもと 計画的に栽培活動をランランタイムの中に取り入れたのは今年が初めてである。

かかわりの難しい子にはどんな題材がいいのだろうか。食べる物はどうだろう。食べるとしても自分で作ったり世話をした作物ならばもっと興味がわくのでは？という発想から「さいばい活動」が始まった。振り返ってみると 以下のような成果や課題があげられる。

- ・背丈よりも大きくなる植物の成長にびっくりしたり たくさんの収穫に歓喜したことがあった。逆に 枯れてしまって植え直したものもあった。それら すべてを見つめることにより 命ある植物の力強さやもろさを実感し 生命をいとおしむ気持ちが育ったのではなかろうか。花や野菜をむしったり 土を掘り返す子がほとんどいなかったことは驚きであった。
- ・テラスに出ると花や野菜がすくすくと伸びているという環境は心をなごませてくれた。草花にはてんとう虫やトンボ・チョウなどが寄ってきて予期しない昆虫の観察もできた。このような環境は街中に住む子どもたちにとって大変貴重に思われる。
- ・作ったものを「～にあげる」という家族を意識しての活動は今までになかったことである。家族や給食のおばさんに「どうぞ」と渡して喜ばれた。このような経験はコミュニケーションを広げ 生活に幅をもたせた。「～におみやげ」といってとれた大根を意気揚々と洗っている子どもたちの笑顔が印象的であった。
このように「さいばい活動」は子どもたちに豊かさを提供したことは確かであるが いくつかの課題も明らかになってきた。
- ・調理や収穫祭も予定していたが「O-157」の問題や収穫の時期が夏休みに重なるなどして計画通り進まなかった。また成育状況に合わせての仕事もあり単元が途中で切れたり単発的になったりした。栽培活動は天候や時節に左右され易いということを念頭においての指導計画を考えねばならない。
- ・グループの色を意識しそれに対応する色の野菜を選んだために 種類が多くなり栽培計画に無理があった。時節に合い 作りやすい野菜にしぼった方がよい。
- ・一輪車・木づちなど見慣れないいろいろな道具を扱ったことは 経験を広げる点でよかった。しかし上手に扱える子から持つことすら嫌な子までいろいろで どんな道具を使って どのように活動させるのかという点での検討が必要である。
- ・低学年の子どもたちにとって種まきから収穫までの期間が長過ぎて 見通しの持てない子が多い。やはり栽培は高学年が中心となる活動ではなかろうか。実際花壇の組み立てなど力のある高学年が行った。ランランタイムではどのように「さいばい活動」を取り入れていったらよいのか もっと吟味していかなければならない。

（４）小学部における豊かな心と生活とは

「さまざまな場面での物や人との関わりの中で自分らしさを発揮しながらのびのびと生きること」と定義づけ 適切な「かわいあい」と「その子らしさ」の中に豊かな生活と心につながるものを見つけようとした。

周りの人を意識して主体的・自発的にかかわる活動の積み重ねが 経験を広げ豊かさに連なるのではなかろうか。つまり ひとりぼっちでなくみんなで取り組むという活動の中に 友達や先生や家族を意識して一生懸命になれるような場面を設定していくことが大事ではなかろうか。友達ががんばっているから「僕もこわいけれどしてみる」「したいけれど～にゆずる」というように相手を意識したうえでの行動や 友達を思いやり認めようとする態度が育って欲しいと考えている。

また その子らしさは「喜び進んでする」活動の中に私達が見つけていくものではなかろうか。小学部全部の友達と教師が一堂に会し しかも縦割り集団で行う様々な活動の中に 学級では見られない「喜び進んでする」姿 その子らしさを見いだすことができた。子どもたち同士もお互いの「らしさ」を認めることにより 友達との関係で自分の立場や役割を客観的に理解し かかわり方に変化がみられた。このような活動の積み重ねが集団の質を高め 豊かさに連なるのではなかろうか。

(5) ランランタイムの更なる充実を求めて

今までの集団学習「部朝の会」は学級という基礎集団が集まって ダイナミックな活動を展開することにより 社会性や情緒の安定を図っていかうというものであった。今回「ランランタイム」へと脱皮するには 豊かな心と生活を目指しての4年間の実践研究が必要であった。つまり 学級集団ではなく 小学部全体の縦割り集団を基盤にした実践の定着と意味づけ 加えて「かかわり」「その子らしさ」という点からの一人一人の目標を意識した単元の設定などがあげられる。このようなねらいと内容・学習形態をもった新しいランランタイムは グループにおけるリーダー意識の芽生えや 学級をこえたつながりなど ユニークな学習活動となりつつある。

今後 栽培も含めた活動内容をどう組み立てるか。一人一人を活かす指導はどうすればよいのかなど検討を加え 更に内容を充実させていきたい。

(浦 田 節 子)